



俗話的

江戸の俗話

岩木無縫 著

岩木無縫 著





堺 枯川 序文
岩本無縫 著

詩的 俗謠
江戸むらさき

世に神様の頻々として出現する時、社會黨は平然として衣食住の問題を論じて居る。世に天才主義の流行する時、社會黨中には凡人社を起す者がある。されば世のハイカラ新體詩に對して、社會黨の詩人が俗體詩を吟ずるは、實に當然の事である。霞外、無縫の二子、其才の發する所、或は演劇となり、或は講

談となり。殆んど往くとして可
ならざるはなきの有様である。
俗體詩の如き、亦た只だ其の妙
技の一である。

社會黨は俗體詩の作者たる二
子を有するを以て誇とすべく、
世人は二子の俗體詩に依つて社
會黨の心意氣を知るべきである。

社會黨の凡俗人 堺 利彦

序のかわりに

無 縫

▲あだむらさき

辻を曲つた提灯は、ゆかしかよふが女文字。
父をたすけて十八年を、朝に夕に提灯張りの、
ちつと耐ゆる胸の火の、泣くに泣かれぬあは
れを思へ。庭の朝顔あだむらさきの、咲かす
に散らしてならりようものか、秋の嵐が吹く
度毎に、思ひ出すぞやみじめな浮世。

▲心中

死ぬが厭なら生きても居よが、又と逢えない
間ではないか。夏の日南の繻ゆるみ桶、繻が
ゆるんでくづれよ手桶、くづれて燃え切りや
思ひが盡さる。

▲泣寝

添へぬ飽の片戀と、名も恨めしい春の野に、
ぢれて泣き寝の涙の玉を、可愛ゆい女蝶が來
ては吸ふ。

▲舟の月

月の涼しい夜の棧橋に、鬼灯吹いて人待つは、
われを松蟲りんとした、小糸が姿と浴衣で知
れる。翌日は落藉れて蟲なく鄙に、『わたし
や何うして暮らさりよう』。二人落ち行く舟の
月、千々に碎けて更けてゆく。

▲枕問答

宵は酒盛、夜半は口説、小夜更けがたの有明
燈に、小首傾げて思ひ羽よせて、枕問答を蟲
が聴く。

1

4



俗詩
謠的 江戸むらさき目次

梵天帯	岩本無鐘
磯多の娘	一
樓八小紫	三
人生	六
故郷百女	七
この花櫛を	八
秋のといめ	九

落人姿……………一〇
 あの板廂……………一一
 一本樫……………一二
 山の湯……………一三
 戀に死變に……………一四
 富士見茶屋……………一五
 浦里時二郎……………一六
 魚河岸……………二〇
 銀座の柳(狂調)……………二一

圖書館の机が曰く(狂調)……………二三
 江戸むらさき……………二五
 御嶽大根……………二五
 山て小説……………三一
 鱧ウ鱧ウ……………三五
 瓜盗人……………三九
 源ちやん……………四一
 淺草海苔……………原 霞
 機織歌……………四九

梵 天 帶

岩 本 無 縫

血 祭	六〇
落ちた涙	六五
貧ゆえ	六八
夜の首	六九
乞食の兒	七五
下層の涙	七八

穢多の娘

わたりや穢多の娘
遠い布哇に
雁が歸ろが
花が咲からが
花も咲かない
泣くに泣かれぬ

世に嫌はれて
來てはや三年
燕が來よが
雀が啼こが
わたしの身命
淫賣婦の稼業

岩本無縫

同業女は歸るか
舟が來たよな
窓に出て見りや
遠い布哇に
わたしや穢多の娘

浦山しさや
夢さゝつけて
たゞ月が射す
來てはや三年
世に嫌はれて。

權八小紫

宵は酒盛
泣いて寝につきや
主は歸るか
又と逢へない
泣いて別れちや
笑ひなんしと

夜半は口説
はや曉の鐘
歸さにやならぬ
この後朝に
思ひが残る
目と目に涙



主は着いたか
 青い矢來の
 わしが此の世の
 松葉松葉の
 主を可愛いの
 ○

あの鈴が森
 空蒼く松は
 思ひをうけて
 一本つゞに
 涙が光る。



黒い小袖に
 主は今頃
 駒は四ツ白
 前に立てたる
 思ひ出しても
 ○

繩かけられて
 高輪あたり
 南をさして
 大身の槍は
 命がちとむ

人生

春は花さく
草木が芽ばむ
霞がかゝる
意がはげむ
光りが満ちる。

人は働らく
意はげむ
光りが満ちる。

故郷百女

之れを思ふて歌はざる、涙となる。之れ
を歌ふて笑ふ、快となる。まことにふる
さととは、母に之をかけたるが如きもの
なり。先づこゝに百篇のうち入篇を試む。
この花櫛を。秋のとゞめ。落人姿。あの
板廂。一本檜。山の湯。戀に死靈に。富
士見茶屋。即ち是れ。

この花櫛を

軒に鹿なく
峻高く寒いが
芒がくれの
ぬくい温泉に
餅の十五夜
雁がなくぞへ
木曾の櫛賣
雪の面輪で
誰にやらうか
信濃の國は
木の實がうまい
富士見ながらに
肩まで浸たす
菜汁の秋は
諏訪湖の空に
檜笠をかむり
「櫛めしませ」と
この花櫛を。

秋のとゞめ

糸を打つとて
庭の柿の木
三毛がじやれつく
姉が笑へば
婆々がお珠敷を
秋の止めは
晩にや行きましよ
都役者の
寄る稻むしろ
鴉を追ふて
柿守案山子
妹がころげ
さげて出る
この一庭
村盡の芝居
上手がござる。

桐きり呼よこ 藁わら石いし草くさ青あお長なが豆まめ
 の べ な た の の の の の の
 花はなば 見み打うの の の の の の
 散ち隠かくつ 小こ白しろ蛙かはづ轍わたち嫩よたば
 る て れ て 笑え音おと橋はし根ねが を の に

あの板廂

あ 隠かく初はつ五ご野の葦あし染そめ痕あと雨あめ
 の れ 嫁よめ兵衛べいゑ川がは手て模もゆ 降ふる
 板いたて 覗のぞが 背戸せとを 越こせ 水みづ中なか
 廂びさしく た に ば 書がき様ようは を

飛とま 舟ふね岸きし青あお製せい栗くり
 ん て ぬ 行ゆ逃にげを 月つき糸いとは 盈えむ だ よ
 行ゆき た や 芽ちの 根ねが 芒すすきが 招まねく 父ちち母ははな ら ば
 なる なら 招まねく 父ちち母ははな ら ば

落人姿

あ 雁かりの 羽はかり 父ちち母ははな ら ば
 の 月つき世よ界かい。 招まねく 父ちち母ははな ら ば
 招まねく 父ちち母ははな ら ば

一本櫪

澤蟹は目を
田螺ころがる
清水掬びて
朝草刈の
草の匂ひに
丸い野山の
一本櫪の
初夏の光りが
男櫪の木魂が

動かかして
細谷川に
辨當ひらく
むすめが三人
折さしたるは
夏の花
葉と葉をもれて
股に照る
魅入りはせぬか。

山の湯

手鍋米背負ひ
石の湯槽の
榎の高いに
浴衣すがたの
鐘も鳴らない
更けて寢覺の
細い湯瀧に
聲に惚れたよ

山湯にのぼる
朝ぼらけ
啼く駒鳥や
夕暮を
山の上へ
耳元の
女がうたふ
峰のうたふ月。

戀に死靈に

鳴 惚 梓 峰 唐 戀 裏 柿
け れ 巫 の 唐 に の の
よ た 女 の 澤 死 酒 實
蟋 男 胡 松 瀧 靈 肆 ほ
蟀 が 弓 は 風 の に は ど

月ある頃を
梓巫女よび入れて
口よせを聞く
遠音によせて
あの杉の風
ものゆかしさよ
無理だとならば
死ぬそれまでは。

富士見茶屋

原 何 今 登 茶 松 代 甲
の 所 年 り 屋 葉 々 州
名 へ 嫁 庭 降 の の 句 光 境
物 入 の の は に る の

富 真 浅 姿 馬 桐 箏
士 鍬 黄 蕎 子 の 筒
見 茶 蕎 蕎 蕎 蕎 蕎
茶 茶 茶 茶 茶
屋 屋 屋 屋 屋
なく なり ます

浦里時二郎

魂こほる
雪はしんく
今宵は雪ゆへ
にくい浦里
松に縛して
偲び泣く音を
貫ひ泣きする

此の丑三つを
松さへ折れる
鴉母のお杉
雪責めにとて
責めさいなまれ
みどりも俱に
いたいけ姿

わたしや今宵で
舌が凍るか
息が火になる
焦れる其火で
こゝを出ように
細い柳の
雪に折られて

もう死にますぞ
息さへ出ない
術もあらば
繩焼き切つて
悲しやわしは
廓のからだ
もう死にますぞ



手拭ぬぐひ覗のぞいて
 「さわぐまいぞな
 直すぐに逃にげる」と
 夢ゆめの廓くわくの
 かあいくと

「アレ時ときさんか」
 これ浦里うらや
 支度しどにかゝりや
 空そらとびながら
 啼なく明あけ鳥からず。



息いきのある間まに
 聲こゑが聞ききたい
 ○
 松まつをたよりに
 人ひと目め包つんだ
 心こゝろも空そらに
 繩なわもとくく
 口くちに移うつした

唯ただもら一ひとと目め
 唯ただ一ひと聲こゑを
 塀ひ乗のり越こへる
 黒くろ頬ほ冠かぶり
 飛とび縫ぬりつさ
 浦里うらかへ
 戀こひ雪ゆき水みづに

魚河岸

鮪^{まぐろ} 庖^{ばう} 丁^{てう} が 光^{ひか} る げ な
 河^か 岸^{あし} に は 鱗^{うろこ} が 光^{ひか} る げ な
 掌^て に 手^て に 銀^{ぎん} 貨^{くわ} が 光^{ひか} る げ な
 兄^{あに} の 啖^{たぐ} 火^{くわ} が 光^{ひか} る げ な
 と ころ へ 朝^{あさ} 日^ひ が 光^{ひか} る げ な。

銀座の柳

(狂調)

昔^{むかし} 柳^{りゅう} の あ は れ な 咄^{はなし}
 知^し つ て 居^お り や る か 人^{ひと} 間^ま 様^{さま} や
 恨^{うら} め し い ぞ へ 市^し 区^く 改^か 正^{せい} 委^い 員^{いん}、
 曉^{あけ} の 鴉^{からす} か ら 夜^よ 中^{なか} ま だ
 浴^あ び せ ら れ る よ 埃^{ほこり} と 塵^{ちり} を
 何^{なん} の 因^{いん} 果^{くわ} て 銀^{ぎん} 座^ざ の 中^{なか} へ、

棒で叩かれ小僧にゆられ
 足は煉瓦の枷はめられて
 何んで肥えよかわたしの樹身、
 見捨てしやんすな銀座の柳
 春が来たなら靡いて見せう
 可愛がらんせ笑ふて見せる。

図書館の机が曰く

(狂歌)

私の面になにがある
 錐の痕墨の粕涎の跡も
 與三もはだしの小刀疵も、
 歌が書いてある戀の歌
 山水天狗に相合傘に
 ちかめひよつとこ蝴蝶にとんぼ、

來るく博士に小僧に隱居
 讀めぬ洋書をひねくる半可
 べツトじやあるまい寢に來る野郎、
 上野の翠微に蟬がなく
 紅葉に雪見に朧夜の鐘
 圖書館住居も悪くはないが
 机裏の鼻糞にはこまる。

江戸むらさき

次北中山鉛
 山村鐵
 權秋迂
 郎雨湖子人



御嶽大根

鉛鐵迂人

御嶽よいとこ大根の名所
 酒屋三里に豆腐屋一里
 一里あるとも何事欠かぬ
 熱いフロフキ精進ナマス
 手前濁酒に女房のお酌
 何を云はしやる都の御人
 シチウカツレツ鮪の刺身
 それも跣足の甘味がござる

二

今朝は夙うからお里を連れて
 山の畑に大根の收納
 お里抜ぐく眞白い手して
 小春最中の紅葉の溪に
 反響す小諸の節面白う
 何を云はしやる都の御人
 兩の客間に三味とる歌妓か
 それにや見られぬ可愛さがござる

三

最早晝飯時小松の丘で
 二人並んで結飯をとけば
 家媪が甘煮のお芋のおかず
 つまむ手ぶりのあのしほらしさ
 どうせおいらは幸福者じや
 何を云はしやる都の御人
 上野浅草隅田の堤
 そこじや出来ねー楽しみがござる

四
 收納つた大根は清水で洗うて
 わし等二人で筏に乗せて
 多摩川を流してお江戸に出ます
 そすりや兩岸には小鳥がうたふ
 これさ聞かしやれ都の姉サ
 燕脂を捺摩つたチツチャイ口で
 大い澤庵食はないものか

五

ヤレ背負へく五丁の坂じや
 百舌鳥が来て鳴くもろ日が暮れる
 アレサ向ふの小山の蔭で
 風呂が沸いたか貝吹き立てる
 これさ聞かしやれ都の御人
 一日かせいで勞れて汗を
 可愛い女房があつさり洗流す
 こんな氣持ちは自慢じやないが
 都市の錢湯場じやよう見られまい。

山やまで小こ謠らは空くう兵へい衛ゑが
 浮うき世よをよその詫わび住ず居ゐ
 今こと年とし十じゅう九くのお染そめ兒こに
 婿むことらせうの願ねがひ哉かな
 村むらの三さん太たは容かほ貌りようよし
 男をとこざかりて金かねためて

山て小謠

山の子

氣前きまへさらり、のあれのうと
お染そめほの字じに頬ほを染そめた

好すいた間まなら惚ほれてもよかる
惚ほれた間まなら添そうてもよかる
くツつけ、ひツつけ、もつれ糸いと
もつれ合あうたが世よじやものを

三太さんたをどうじやと空兵衛くうべゑは
ほくそゑみくふりかへる
ふりかへられてお染そめ見みが
顔見かみせまじと耻はらうた
からかひまじりの一言ひとことで
心見こころみられる悔くやしさに
嫌いと云いひたし嫌いとは云いへず
惚ほれた因果いんぐわを今更いまさらの

好いた間なら惚れてもよかる
 惚れた間なら添うてもよかる
 くつつけ、ひつつけ、もつれ糸
 もつれ合うたが世じやものを。

初松魚

中村秋湖

鯉ウ 鯉ウ
 お江戸なりやこそ土一升金一升
 箱庭の様なと田舎者がわらふ
 これでも夏さへ来れば緑雨
 酒屋は新道に御用があらば
 豆腐やは毎晨の呼聲に覺されても
 やつぱり聞かれる杜鵑の初音千雨

鯉ウ 鯉ウ ○
 布子典したら嫌アがわめく
 それ承知もとより合點
 年越しに着物持たぬが何て耻だ
 どんぶりにうごめくは、とつたばかり
 の生きた銀よ
 江戸ツ子は此面が先づ第一の寶物さ
 何の汝等に此味がわかるものか

鯉ウ 鯉ウ ○
 織色の鯉口衣が見得ぢやア無へのさ
 水に干ぬ盤臺は此方等が商賣の當然
 よ夕月にキラリと光る勢ひの初物と
 松葉山道の向鉢巻
 此聲ばかりが自慢の賣りものだ
 エ、買へ買へ買へ生の魚よ

鯉ウ 鯉ウ ○

價をきく程なら買はねへがい、
 俺ア喰ふんだ見るんじやア無へ
 頼むよ片身は厚く作つて呉んねへ
 来たな五合ヲツト大根を忘れめへぜ
 鐵やい喜三やい留ツ子も来い
 翌は裡體だが今日は幸と未だ肌ぬぎよ。

瓜 盜 人

北 山 權 雨

瓜 盜 人よ待てしばし
 見ればおぬしは年若な
 似るともようも似たものよ
 死んだ息子と瓜二つ
 俺と二人で喰つたのも
 こんな月夜の晩じやつた

瓜が欲しうておぬしは来たか
 おなじ喰ふなら一緒に喰つて
 ちやんと一言いふてくれ
 あゝこれ逃げるか俺あ父だ
 足の利かぬを知つての事か
 後生しらずがこれ此通り
 掌を合しての御願だ
 ちやんやと言ふて言ふてくれ。

源 ちやん！

次

郎

蝙蝠啼いてあの父島の
 港静かに灯ともし頃を
 今年五つの源ちやんは
 伏床をぬけて窓による
 ひごたらしくも唇は
 裂けてうるみて
 「母ちやんよ！」

八百屋の姐さん右隣り
 お膝の上に源ちゃんの
 お手をとりにて此のやうに
 「お前の母ちゃん西島へ
 魚釣り故おとなしく
 妾と一所に遊ぶのよ」

根元に船は繋がれて
 磯の濱桐はらくくと
 向岸の村の人散れば
 赤い草履に砂立てゝ
 可愛い眼に露ふくらませ
 赤い睫で
 「母ちゃんよ！」

西島よりの船便はあれど
 源の母ちゃんつい見えぬ
 綿奴は白い舌を出し
 鼠は林投樹の實を噛る
 もう秋過ぎの今はたゞ
 お砂糖しぼる牛の唄

お雑煮食べる正月も
 源の母ちゃんつい見えぬ
 思ひ迫つて源ちゃんが
 隣家へ行つては姐さんの
 お膝をゆすつて
 「母ちゃんは！」
 濱邊を迷ふて
 「母ちゃんは！」

憐れ悲しい聲となり
 桐の緑の影さへ消えた
 どうして母ちゃん歸らぬか
 どうして母ちゃん西島へ
 お垂髪の源が髪結ふた
 姿一目も見るさへあはれ

島で媚好しおきみといふて
 唄に名高い粹女
 源の母ちゃん西島へ
 ゆく其の船の船長を
 隠夫して逃げ去つた
 家も吾子も振り捨てゝ

源げんの父ちち親おやはその日ひから
 嫌きらつた酒さけも吞のみ拔ぬけに
 醉えふては管くだを卷まきながら
 罪つみなき源げんを叱しかるのを
 聲こゑさゝつけてお隣となりの
 姐あねさん源げんやを袖そでにして
 父ちち親おやごめんよわたしが詫わびる。

淺
草
海
苔

原
霞
外



機織歌

(工女が歌へる)

原霞外

わしが生うまれは越後えちごの在ざいよ

女をんなはだへは雪ゆきの國くに

寺てらの和わ尚せう様さま御お慈じ悲ひが深ふかい

七十八しちじゅうはちの生いぼとけ

村長そんちやう様さまはつむりが禿かげて

奥おく様さま若わかい薄うす化け粧しょう

ああの學がく校かうの先せん生せいさまは

豪れいい學がく者たじやと申まうします

隣り村との水論さへに

先生ひとりてなかなかほり

二

わたしや十二で父者に死なれ

十三十四泣きあかし

十五の春に都へ旅路

思ひ廻せば二年あと

今年十七夜毎の夢は

帯が買いたや京臙脂も

紅い振袖あだ美しい

他家の嬢様見るたびに

死んだ父者を勿體なふも

恨んで泣いて居りまする

泣いて眠れば枕もしめる

夜着の袖さへ肌さむら

からして織つた此綾衣を
 何處の殿御か着やるやら
 着るも人なら織り手も人よ
 おなじ浮世にすみながら
 ほんに思へば身がうとましい
 天道様もなさけない
 村の鎮守へあれ程までに
 供物あげたも何のため

蚤もせれば寝もやすからで
 聞くは淺草あけのかね
 又も苛責の筈のもとに
 つらい労働の今日も來た
 あの監督の意地わるさ
 技手の髭面にくらしい

三

苦勞せうとて拜みはせぬに

えいあんまりな神ほとけ

四

こんな事なら一層の事に

五才のときにいたづらで

落ちた小川にいつく迄も

魚とあそんで居たものを

救ふてくれたは太五兵衛様の

ひとりむすこの金太さん

色が白うて愛嬌ようて

可愛い見ぢやと褒められて

逃げかくれたも十年むかし

今年二十歳にならしやんす

筑波あろしに便を聞けば

まだ獨身は何として



山河へだつ故郷のそらに

母さん今年五十八

別れの曉に太五兵衛様と

わしを送つて村はづれ

もう行きやるかと袖ひきとめて

壯健でのうとすゝり泣き



何日ぞや盆のお祭の

踊りに妾が手を交つて

忘れまいぞとにこやかに

覗きこまれたはづかしさ

五

あゝ思ふまい身ばかりか

我身ばかりで無いものを

風お引きやるな水飲み過ぎて

病み患ひをせまいぞや

ときどき音便安心させや

そなたの歸るそれまでは

死にはせぬぞよ佛のまへに

陰膳すえて待つて居る

あのお言葉は今更ながら

あついで涙のたねとなる

あれ鈴が鳴るわたしを呼ぶは

かなしい友のお薦さん

あれも可愛や双親なして

え、今行くに待たしやんせ

泣きに行からか涙を拭いて

また叱られぬそのうちに。

血祭

老爺

お代官とて容赦があるか
斯うなるからは百年目
百姓じやとて人じやもの
食はずに生きて居られうか
何うせ死ぬなら此怨み
晴らして死なう喃太郎作よ

太郎作

ほんに老爺の言ふとほり
年が年中膏汗
雨の朝に風の夜に
苦勞さんく其上て
ヤツと果報の實が出来れや
ソレ年貫!

ヤレ何じやのと嘘たれて
 片ツ端から奪りたてる
 厭じやと言へば眞つ二つ
 代官様は強盗じや
 喃芋作よ然じやないか

芋作

ソンナ操言いはうより
 モウ焼糞だ鋤に鋤
 蕙の旗に竹の槍
 攻め太鼓は誰れが打つ
 法螺貝吹くは己が役

老爺

先づ腕試し、膽試し
 村の難儀を知らぬ顔
 代官にへつらふ庄屋奴の
 白髪ツ首をひん抜いて
 門出の血祭、サアつゞけ。

落ちた涙

都はなれた片山里の
 田舎娘の妾ちやとても
 胸にや血もある涙もござる
 戀といふ字を知らぬじやないが
 春花の雫で小指を染めて
 文まいらせん殿御もあらず

梅の香りにツイうか／＼と
 いさゝ小川の岸邊に來れば
 水にながれる朧の月に
 寂しさうだよアノ子守唄
 『辛い奉公もモ一今日かざり
 明日は嫁入り妾が殿は
 あの藪際の次郎兵衛後家の

獨り息子の忠三郎よ』
 えゝうらめしいアノ子守唄
 妾も負けぬ氣聲張りあげて
 泣いて唄ふて歌ふて泣いて
 泣いた涙が小川に落ちて
 落ちた涙をのせ行く水を
 飲んだ男子が妾しの殿御。

貧ゆえ

貧ゆえと思へば慙れ泥坊を
探す役目も貧からと
思へばつらし雪の夜を
外套一と重に身をつゝみ
寒さにこぼるサーベルの
柄の間眠る時も無く
軒端の犬を友の身の
家には嘸や女房が
吾身案じて獨り寐の
煎餅蒲團はなほ寒からふ。

夜の色

泣く見に乳をふくませて
女房小聲に怨ずらく
喃こちの人冬が来る
冬が来るぞへこちの人
つゞれの拾一枚で
こなさん冬をすごす氣か
わしやお前は何のやうに
何としてなと過ごさうが

可愛相なは見やしやんせ
 罪も頑是も無い此兒
 こなさん坊が憎いのか
 坊が可愛は無いかいな
 亭主盃下に置き
 目をむき出して怒鳴るらく
 ナニ吐しやがるお多福め

俺だからって道樂や
 好きで貧乏するじやなし
 意氣地のねえ父親を
 もつたが因果の此餓鬼が
 手前ソレ程可愛けりや
 坊と一所に心中しろ

野郎は聲をひそめつゝ
 女の方から暇くれと
 言はれて何と返答も
 出来ねえ程の此己を
 亭主にもつも前の世の
 約束ごと、諒らめて
 嬢よ、後生だ今しばし
 頼む辛棒してゝくれ

破れ壁一重彼方には
 屑屋の嗅アが胴魔聲
 お前はドコ迄意氣地なし
 朝から晩まで夫婦稼ぎ
 ソレで米屋に五十錢
 醬油屋、薪屋に四十錢
 壹圓たらずの借金で
 男が頭をさげるとは
 愛憎が盡きた暇お呉れ



向ふ三軒長家中
 貧ゆえ起る夫婦喧嘩も
 やがて静けき溝板に
 鼠鳴くなる真夜中や
 遙か聞ゆる三味太鼓
 意氣な都々逸三下り
 げに、さまゝの夜の色。



乞食の子

坊が故郷は二條の橋の
 橋のたもと柳の下よ
 生れて戀しい母親知らず
 今年九歳父親さへも
 何處に居るやら達者やら

たゞ坊一人て大ききゆうなつて
 友はあれども皆意氣悪よ
 坊は一人て朝とく起きて
 旦那嬢様奥様がたの
 お袖にすがつて一錢二錢
 それで芋買ふて大福買ふて
 夜は薪屋の俵の間で
 坊は一人てねんねする

寝てもさめても乞食は乞食
 乞食の子よと坊様たちに
 打たれ笑はれいじめられても
 どふせ三界親なし子の身
 坊は一人て小川の岸に
 泣いてうたふて遊びます。

下層の涙

巫山戯ちや不可ねえ雪見の酒と
 汝等はイヤに風流がれど
 其日おくりの己れたちや如何だ
 稼ぎにや出られず袷天まげて
 買った米さへもう無くなつた
 下層の涙を馳走の酒が
 汝等はソレ程うめえのか
 癢に觸らア汝等が脛に
 喰ひつくからサウ思へ。

不許複製

定價金二十錢

明治三十九年十一月廿五日印刷
 明治三十九年十一月廿八日發行

著者 岩本無縫

東京市小石川區中富坂町八番地
 發行者 笹山藤兵衛

東京市神田區維子町三十四番地
 印刷者 宮本敦

發賣元 東京市神田區表神保町 東京堂

